編者まえがき

国際基督教大学ではアジア研究に力を注いでいる。ICU の初代学長であった湯浅八郎先生は、ICU は国家、民族、文化、そして学問分野の間にある壁を超える大学であるべきだと主張され、アジア諸国の研究者や学生との広範囲にわたる相互交流を奨励された。1958 年には武田（長）清子先生のご尽力によってアジア文化研究委員会が発足し、1971 年に現在のアジア文化研究所へと改編された。武田先生は本研究所の所長を長年勤められ、その御指導の下で本研究所は、日本を含むアジア諸国にかかわる研究活動を援助し、アジア社会の歴史的展開を世界史的視野のもとに理解しようと務めてきた。特に 1）アジア社会の文化—歴史・宗教・経済・政治等—に関する研究に向けた、アジアをはじめとする各国研究者の招聘、2）アジアに対して共通の学問的関心を持つ大学・研究機関・研究者グループとの共同研究、3）研究資料や論文などの募集・整理・保管、4）研究会・講演会・セミナー等の企画・開催、5）『アジア文化研究』（*Asian Cultural Studies*）その他での研究成果の出版、という 5 つの活動を行っている。

『アジア文化研究』29 号所収論文は 10 編で、内 2 編は日本語、8 編は英語である。また、書評を 1 編掲載している。当研究所ではアジアに関する論文の投稿があれば掲載を検討しているので、論文、翻訳、書評など、ご寄稿をお待ちしている。印刷原稿（400 字詰め原稿用紙 50 枚程度）と電子情報（フロッピー・ディスク）両方での提出をお願いしている。以下に本号掲載論文の要約を記す。

高澤紀恵氏の「都市・平和・武器——1614 年パリ断章——」は、1614 年 4 月にパリ市当局と国王直属のシャトレ裁判所の間で、武器取り締まり禁令の発布をめぐって起こった抗争を題材に、都市の平和の維持を自らの特権と考える都市社団と、それを自分の管轄領域とするシャトレとの間にあった厳しい対立関係を析出した論文である。抗争の時代背景を明らかにした上で、1594 年から 1633 年というタイムスパンの中で、王権による都市社団とシャトレの懐柔政策の推移と、1614 年の三部会に繋がる展望を示すことを試みている。

M. William Steele 氏の "The Anglo-Japanese Alliance and Japanese Nationalism" は、1902 年の日英同盟の締結を一般の日本人がどう理解したかを当時の新聞の論説や挿絵を通して描いている。日清戦争後の様々なナショナリズムの流れの中で日英同盟は大歓迎されたが、それは明治維新以来西洋諸国に追いつこうとしてきた日本がついに英国と肩を並べ「強国」の 1 つとして世界に認められた誇りと喜びの表明であるとともに、必ずしも排他的なナショナリズムではなく、この同盟によって日本が英国とともに東洋に平和と繁栄をもたらし得るという希望が広く共有されていたと指摘している。

Hiroko Willcock 氏の "Advent of a Meiji Prophet and Carlylean Man of Letters: Uchimura Kanzō, 1885-1896" は、19 世紀末における内村鑑三のキリスト教的日本人の倫理思想をトーマス・カーライルの影響という視点から検討している。内村が『代表的日本人』において描いた日本の偉人像を、カーライルの英雄像と比較分析し、両者の思想の類似点と相違点を考察している。新しいものが融合する初期段階においては、類似的要素が意識的に見出されるという近代化の時代における多様でダイナミックな思想変容の一側面が明らかにされている。

Rosemary Gray Jeffcott 氏の "Japanese History: A View from Tsugaru" は、津軽から見た日本の歴史に関する論考である。日本の首都との関係で見た津軽が、地理的、経済的、

政治的、そして歴史的に、周辺地域であることは自明のことである。太宰治が説いたように、日本の歴史においてこの地方は全く無視されてきた。一般的に受容されてきた歴史の中で本州北部の地域は日本国家によって文明化されるべき対象にすぎなかった。しかしながら、時代をこえた文化的側面に注目するならば、この辺境の周辺地域についてより豊かな歴史を記すことができる。そのような歴史から見たとき、世界は近代国家の寄せ集めではなく、より複合的で相互に密接に関連しているものであることを指摘している。

Jacqueline Ann Houtved 氏の "Building a Rich Country and a Strong Army: A Japanese Merchant's Suggestions on How to Achieve Wealth and Power" は、伊勢の裕福な商人であった竹川竹斎が記した『海防護国論』(1853 年) と『海防護国後論』(1854 年) にもとづき、江戸時代末期における海外列強の脅威に対する商人階層の提言を検討したものである。この二書は、実践的な軍事技術、軍備にかかる費用と時間の記述などについて、商人としての視点で書かれたものである。竹斎は、中央集権化された徳川幕府に対し、日本全土の安全なくしては真の安全はないと指摘し、各地の大名が軍備を整え、武器の製造を奨励することによって国防が強化されると主張した。また、軍事的視点からだけでなく貿易の推進という視点からも強力な海軍が必要であると説いたことを明らかにしている。

Christian W. Spang 氏と **Michael Wachutka** 氏の "'Made in Japan': An Introduction to Recent Tokyo-based German Historical Research on Modern Japan (1853–1945)" では、日本近代史に関する主要なドイツ人研究者による最近の研究成果を紹介している。東京にある代表的ドイツ学術研究所である The German East Asiatic Society (OAG, 1873 年創立) と The German Institute for Japanese Studies (DIJ, 1988 年創立) について述べたうえで、近代日本史に関する約 30 の研究を論評紹介している。日独関係のみならず、広く近代日本史に関心をもつ読者にとっても興味深い論考である。

Jim Matson 氏の "American Historians and Japanese Textbooks" は、2002 年春に本学で開催された氏の公開講演に基づいている。2000 年と 2001 年のピューリッツァー賞を受けた John Dower の *Embracing Defeat* と Herbert Bix の *Hirohito and the Making of Modern Japan* の二書は、扶桑社発行の『新しい日本史』に鋭く対立するものであった。本稿はこれらの受賞作の学問的貢献について検証し、国際的学者たちが日本の歴史教育のカリキュラムに対して果たしうる役割について、より一般的な問題を呈するものである。

佐藤豊氏の "Externalization in the Temporal Affix Construction" は、「中」「後」などのアスペクト素性を持つ名詞を主要部とする副詞句における動名詞の内項の外項化という現象を、ゼロの軽動詞を想定することにより説明している。動名詞はそのような名詞と結合した場合、「する」との複合語の場合とは異なる他動性を示すのに対して、動詞の連用形の場合はそのような変化が見られないことから、動名詞の場合、動詞格付与能力も持つゼロの軽動詞と結合し、そのゼロ軽動詞が内項の外項化を引き起こすと論じている。

石渡茂氏の「『小北文庫』：オーストラリア・ニュー・ジーランドその他太平洋地域の研究の宝庫」では、小出満二教授（鹿児島高等農林学校）が、1918 年 2 月から約 2 年間シドニー大学に出張した際に購入した「小北文庫」(鹿児島大学附属図書館所蔵) が紹介されている。タイトル数 693 と小規模な文庫だが、地域的にはオーストラリアを中心とした太平洋地域、分野は、歴史・地理旅行・民俗学・社会科学・農業・家畜・工業鉱業交通・芸術・言語文学等、多岐にわたる点で特色があり、刊行年次も 1668 年から 1930 年前半までと、今日では貴重な資料が多い。地域研究の宝庫であり、今後は広範な研究者からの利用を期待したい。

本号には 2002 年の研究所活動報告も収録されている。最後になったが、本号の編集に際して研究助手である宮沢恵理子、宇野（徳田）彩子、高崎恵、孫建軍諸氏の尽力を得たことを記して謝意に代えたい。

2003 年 3 月 31 日
古藤　友子